まだまだわかっていない

―乳幼児理解の盲点―

堀　要

(一)

大人中心に子どもを解釈していた昔にくらべると、児童心理学の発達によってずいぶん子どもをよく理解できるようになった。児童精神医学の臨床にたずさわるようになって三十五年以上にもなる私は、一時は子どものことなら何でもわかっているようにうぬぼれた時期もあったが、そのうぬぼれはこのごろすっかり変質した。つまり子どものことはいかにわかっていないか、ということを私ほどわかっている者はいないだろうというように。

十年ほど前に私はツリガーの書物をよんで、彼が四十年にわたる正常児および異常児とのつきあいで、いかに大人が子どものことをわかっていなかったか気がついたという意味の文章を読んだとき、私のうぬぼれはほとんど絶望におちいるほどのショックをうけたのである。子どもは、大人が考えているそれとちがった所で、大人が考えるのとちがった仕方で考えるので、時に大人はひどく子どもを誤解してしまう、というのである。ツリガーは子どもの世界観と大人の世界観の相異を対比して示してくれたので、私は絶望からまぬがれた。私は子どもの異常行動をなおすことができないときは、まだその子どもをよく理解していないからであると反省することができるようになった。

(二)

私のところへは幼稚園や保育所でことわられた困り者の子どもをつれて母親がよく相談にくる。そういう子どもたちの半数以上は、もうほんの少しだけこの子を理解してくれれば、園長さんや所長さんはことわれなくなるだろうにと思われる子どもたちである。ある時そういう子どもの一人がキリスト教の幼稚

園でことわられたときいたとき、私はさまよえる一匹の小羊をもとめた羊飼いのことが思いだされてならなかった。

ある時、若い夫婦が一人の幼児をともなって相談にみえた。はじめての一人っきりのこの男の子は、なかなか思うように育たず手こずるので、この夫婦は子どもの心理を知らないからだろうと反省して、二人で児童心理学の書物を勉強した。しかしますます手こずるようになったので、たまりかねて相談に来たのであった。二人は児童心理学はよく理解して覚えたのだけれど、かんじんの目の前にいる自分の子どもを、一そう理解しなくなっていたのである。私は二人にもうこれ以上児童心理学の勉強をすることをやめて、この子が出している心からの信号をよくうけとって理解するように努力することをすすめたのであった。

(三)

先日私はある駅のプラットフォームで、少しおくれている特急列車を待っていた。そばで、退屈しはじめた乳児を、若い夫婦が交替であやしだした。私もついつりこまれて表情であやすと、この乳児はすぐににっこりして反応した。別の機会に列車の中で、私が母の膝の上の乳児の視界にはいったので、私は表情であやしはじめたが、すぐには私への関心をおこさない。くり返しているうちに関心をもち出したので、私は唇の間で舌をうごかして、ベロベロをしてみせた。この子は真剣な表情で私の口を注目しだし、やがてわずかに、そのかわいい口からのぞいている舌をうごかそうとしはじめた。ところがまだベロベロの経験がないらしく、なかなか舌がうごかない。そしてこの母親は、さきのプラットフォームの夫婦とちがって、私の見ているかぎりでは、ほとんどこの乳児をあやすという行動はみせなかった。

私は町でもバスの中でも列車の中でも、そばに乳児がいると、よく相手をしようとするのでそういう経験から、このごろの若い母親に、子どもをあやすことを怠りがちな方がふえたのではないか、と思われてならない。さきのプラットフォームで会った乳児と、列車の中で相手した乳児とでは、ずいぶん育て方に差ができるのではなかろうか。

ベロベロについてずいぶん昔のことを思い出した。私の研究室の後輩の奥様が、乳児をつれて私の家に遊びに来た。私の家内がこの奥様と雑談している間に、私はこの子を手なづけて遊び相手となった。やがて私はベロベロをはじめた。この子は大へんな興味を示して一生懸命真似しようとするが、なかなかできない。ようやく舌をつき出せるようになって満足げであった。これをこの奥様がみつけて私にきいた。「うちはこんなことや

らせたことがなかったが、やらせなければならないもんでしょうか」と真剣な表情で質問されたので、私は、戸まどいして、「行儀のわるいことをおぼえさせてすみません」とあやまった。それでも少しばかり弁解がましい解説をそえて質問への答えにした。舌のあそびは後の言語運動に少しは役に立つかもしれません、と。ともかくもベロベロ遊びを修得しないで、舌出しだけを修得したものだからこまった。ただ、ちょっぴり感じたことは、この若奥様は、子どものしつけには熱心なかまえをもっているが、子どもの相手になって遊ぶ、というかまえもほしいな、ということだった。

乳児をあやす母親は、その子が幼児になると、相手になって遊ぶ母親になるのではないだろうか。幼児にとって、一人遊びから親を相手の連れ遊びを体験する。やがて連れ遊びの相手としては親では不満になってくる。そういう不満をとなえた子どもたちが近づくと、一ぺんで連れ遊びがはじまるだろう。幼稚園や保育所で、なかなか仲間にはいらない子どもは、家庭では、親は「遊ばせる」、または「遊んでやる」ことはしても「相手になって一緒に遊ぶ」ことをしない、ということが多いように思う。ことに一人っ子の場合など。こういう時、うまく親が理解できて家庭で連れ遊びの相手になれるようになると、幼稚園や保育所で仲間に入れるまでに一年もかかるところが、半年ぐらいでそうなれるようだ。これは正確にデータはとれてはいない。データがとれていないといえば、きまめに乳児をあやす親と、ほとんどあやすことを怠る親とで、その育つ子にどのようなちがいがおこるか、そういうデータも私はとっていない。どこかにそういう文献があるのだろうか。

(四)

乳幼児の発達の事実はずいぶん詳細に研究されて、研究報告もつみかさねられている。しかし発達を刺激する環境条件については、まだまだ研究が行きとどいていないように思う。

私どものところで、何年か前に富田順博士が十数名の母親の協力を得て、零歳から三歳児になるまでの母子関係をふくめた乳幼児の追随研究を五年あまりかかってなしとげた。大へん貴重な結果が得られたのであるが、私はこの論文や資料を拝見して、「子を育てている母親は子に育てられている」ことを事実として認めざるを得なかった。子を育てるというとき、育てられる子と育てる者との「からみあい」が人格形成に本質的な役割を果たしているように思われる。

教育といい保育という場合にも、教育や保育の実践に際して、教育者や保育者は、「育てよう」とするかまえをはずしてはならない。そしてそのことは子どもが「育つ力」をもっていること

とを前提として成立する。ところが、集団教育や集団保育においては、育てる手段として「教える方法」をとりがちのため、教育者や保育者の「かまえ」までが「教えるかまえ」になってしまいそうである。教育論や保育論をしている専門家さえ、しばしば「教える」という言葉をよく使い、教えることが教育だと考えているのではないかと思われるような論を展開する。そしてこのことが親たちにまで影響して、いわゆる教育ママにもみられるように「教えるかまえ」でこりかたまってしまって、子に育てられる素直な人間性が失なわれがちである。そして心を忘れて「あたまのはたらき」だけで子どもに対応する。親から子へ一方的に働らきかける方法だけをもとめる。教えようとししつけようとして、どうしたらよいかを自分でも考え、育児書をよみ、専門家の意見をきく。そして、「ままにならない」という壁にぶっつかる。子どもから困る材料だけを抽出して、子ども自体を理解しようとする勉強を放棄してしまう。子どもが勝手に育つ状態に放置されるより、もっと悪い事態がおこることもある。乳児をあやし幼児の相手をすることを怠る親の傾向も、こんなところから生じているのではなかろうか。

このようにして、教育者からも保育者からも親からもさえ、子ども自らどういう体験をしているのか、ということが全く理解の外にのこされてしまうことになる。

(五)

子どもは自らにいろいろの体験をつみかさねることによって人間として形成されていく。「ひととなっていく」のである。つまりその体験の一つ一つが血となり肉となっていく。少し科学的にいうならば、ニューロンが機能することにより脳全体が機能化していく。

ところで、乳幼児期に是非体験しておかなければ、そのことが原因になって、その人の生涯にわたって、その人のひととなりの中に大きな欠落となる、そのような体験があるであろうことは、ほぼ確実に推定されるようになった。たとえば乳幼児期に「かわいがられる喜び」という愛育体験が欠乏――精神飢餓ともいわれる――すると、その子はそのためどのような愛情豊かな環境で育てられても、もはや生涯にわたってすくいがたい欠陥として、人を愛する能力、人を信じる能力に欠乏したままにとどまるといわれている。そのような必須体験が、ほかにもまだあるはずだが、どなたかご存知だろうか。私はまだ知らない。そのため安易に集団保育を最上と考える親心がおそろしいのである。

(名古屋大学)